

エッセー

立教大学の教壇を去るに当たって

全学共通カリキュラム運営センター兼任講師 堀越 喜晴

私は2001年度秋学期から、兼任講師として立教大学の教壇に立ってまいりました。そして、ちょうど20年目となる今、光栄あるその場を去ろうとしております。その間にいただきました貴重な学びや、数々の思い出は、皆私にとってかけがえのない財産となっております。この場をお借りして、改めて心より感謝を申し上げます。

私が最初にいただいた授業は、全カリの「キリスト教と諸思想」でした。しかし、私の専門分野は言語学とキリスト教文学。他大学ではもっぱら英語や英文学を講じています。思想、哲学関係の私の知識といたら、高校の倫理・社会の域を出るものではありません。さあ、どうしよう？そこで私が考えた方法は、最初の授業で受講者に、興味のある歴史上有名な人物の名前を挙げてもらい、その思想をキリスト教との関連において考察する、というものでした。ソクラテス、ブッダ、ガリレオ、バッハ、カント、マルクス、マザー・テレサ、遠藤周作……いろいろな人の名が挙がりました。毎回私は本などでその人について一生懸命に調べ、それをキリスト教思想と関連付け、あるいは対比させて教室で語りました。自転車操業もいいところですが、私にとってこれはとてもスリリングで、何より大変有益な知見を与えてくれました。ある学生からいただいた「今までは雲の上の人とばかり思っていた偉大な人物が、この授業を聞いた後では、まるで隣のおじさんのように感じられた」というリアクションは、とりわけうれしいご褒美でした。

次にいただいたのは、文学部対象の「キリスト教と文学」そして全カリの「文学と人間」でした。こちらは専門のど真ん中です。私は毎回、受講者と共にC.S. ルイスのナルニアの国を楽しく旅しました。

その後はなぜか、ボランティア論、点字、障害学といった専門外の授業ばかりがあてがわれました。もとより私はしょうがい当事者ですし、点字は私の母文字です。しかし、ちょうど日本語のネイティブスピーカーだからといってそのまま日本語教師となれるわけではないというのと同様に、しょうがい者が個人的な経験を語ればそれがそのまま大学の授業として成立するわけがありません。それでも最初の「キリスト教と諸思想」の時と同様に、私はできる限りいろいろな文献に当たり、またいろいろな方々のお話を聞きながら、「授業」の名にふさわしいものを作り上げるように努めたつもりです。特に、コミュニティ福祉学部専門科目の「障害学入門」の授業からは、実に多くのことを学ばせていただきました。いずれこれを、私なりの「障害学」として体系づけたいと思っています。

ところで、点字に関する全カリ総合系科目の科目名は「点字から考える人権」です。

私は以前からこの科目名には違和感を持っています。点字はあくまでも一書記体系なのです。特に日本語点字は、漢字かな交じり標記が主流の日本語表記法にあって、極めて稀有な完全表音文字です。そのため、分かち書き法や、「は・へ」の発音に即した表記、長音の棒引き表記など、独自の、そしてある意味先駆的な表記法を発展させてきました。これを十全に教えるだけでも、半期・14回の授業では足りないくらいです。これに加えて、更に「人権」という大きなテーマをも盛り込めというのです。第1回目の授業で受講者の受講動機を聞いてみると、たいてい「身の回りにこんなに点字があふれているのに、読めないのは癪しやくだから」という、文字としての興味を語ります。また最後の授業では、「この授業を取って初めて、『のように』と書くか、『というように』と書くかを考えるようになった」、「これまでは気にも留めなかった、語順の入れ替えによる音律のさまざまな変化を楽しめるようになった」などの声が聞かれます。私はこれまでに幾度か、この授業を言語系の科目に組み入れていただくようお願いしてきました。しかし、その願いが聞き届けられることはついにありませんでした。このことは、20年を機に立教大学の教壇を去る私にとっての大きな心残りです。

とはいえ、私が立教大学から、とりわけ学生諸君からいただいた恩恵の色あせることは、けっしてありません。チャペルの礼拝の中で幾度かお話しさせていただいたことも、生涯忘れないでしょう。全てのことに對して重ねて心よりの感謝をお捧げしますとともに、貴学が今後益々、天にあっては神の誉れとなり、地にあっては人々の平和と幸福の礎として用いられますことを、切にお祈り申し上げます。

ほりこし よしはる